
これこそリアルなハンター生活。

がらな

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

これこそリアルなハンター生活。

【ISBNコード】

258832

【作者名】

がらな

【あらすじ】

主人公はゲームの中にいた。そう、ここはとあるオンラインゲーム世界での出来事だ。そんな主人公ミロクはそのゲームのプレイヤー啓介が帰つてくるまで動くことができない。啓介が帰つてき、ログインするとミロクはハンティングに出かけることができるのだ。あらゆるモンスターを倒していく、個人のレベルを上げて、もっと強いモンスターに挑戦していくゲームだ。そのゲームの中で行われる戦闘をぜひお楽しみに！果たしてミロクの運命は…？！

ハンターたちの心得（前書き）

はじめまして！

今回から新たな小説を書いていこうと思います！

某ゲームに近い気もしますが、オリジナル要素も満載なので楽しんで読んで頂ければなと思います！よろしくお願いします！

ハンターさんの心得

ここは、とあるオンラインゲームの中の世界。

このオンラインゲームは、とても有名なものであり、テレビのCMなどでも宣伝されて、全国の皆さんが知っているオンラインゲームだ。

その他に有名なのは、メイ ルストーリーやドルーガの塔などが

ある。

このゲームは、たくさんのモンスターを倒していくながら、そのモンスターから入手できる素材を使い、装備（防具や武器など）を完成させていく、レベルの高いモンスターに挑戦していくというゲームだ。

一応具体的に解説したつもりだが、わからないのであれば、いい例えがある。

皆んな、聞いたことがあると思うが、モンモンというものだ。

それに並ぶくらいの有名度を誇るこのゲームの中に主人公はいた。

「ううー、暇すぎるうー、早く帰つてきてくれよおおー

そう、主人公はゲームの中にいるのだ。

そして、その主人公が待つてているのは、そのゲームのプレイヤーである山本 啓介だ。

まあ、いわゆる親みたいなもんだ。中学2年生の啓介は完璧な厨二病だ。厨二病の代表者だ。

そいつが学校から帰つてき、このゲームのログインしない限り、主人公さんはベッドから動けないという規制がかかっている。

普段ならベッドで寝ているのが普通だが、今日は何故か目が覚めてしまい、暇という名の敵に襲われ続けていたのだ。

その暇に耐えながらも啓介の帰りを待つ。

そして、2時間後

「たあだいまあー」

啓介様のお帰りだ。

家には啓介以外はいなく親は皆仕事兄弟はない。
ということから啓介は家でいつも一人だ。

帰ってきて、手を洗うより先にパソコンのスイッチを入れる。
パソコンを起動するとまずログイン画面まで行く。そこまで行く手
つきは慣れたもので凄かった。
そして、ログインした。

「うお？ わっしゃ！ 動けるぞー！ 帰ってきたのかー！ やったぜえ
ええええー！」

そうして、主人公のゲームが始まった。
主人公の名前はミロク。

ミロクは、このゲームの中で上級者扱いされてる結構いい腕のやつ
だ。

そしてログインが完了し、ミロクは集会所へ出た。ここは『フェイ
ルの村』と言われる村だ。ミロク達はこここの村でハンター生活を過
ごしている。

〃ロクがログインしました。

「オオー、ミロクじゃーん！ 遅かつたなあーーー！」

「ああ、悪いな、啓介が帰つて来んの遅くてよお」

「そつかそつか、それは仕方ないな！」

ログインするや否や近づいてきたのは、いつも共にクエストをクリアして行っているハンターさんだ。

そいつの名前は「たかやん」という。

たかやんはミロクと同じくらいハントティングがうまくて、常に一緒に行動している。

基本は一人で何でもこなして行ってしまう。そんな一人は、今日もハントティングに行く。

啓介の一日のゲームのプレイ時間は約8時間程度。周りのプレイヤーからすると長く感じるが、啓介自身は少ないと思つているらしい。

素晴らしいゲーマーだ。一度ハマったゲームはあまり飽きないらしく、長い間やつていられる体质だそうだ。

今回はハントティングに行かず、このゲームについて詳しく説明していきたいと思う。

まず、ハンティングに行くためには、クエストを受注しなければならない。

クエストにはレベルがあり、下級、上級、アドバンス級、と3段階に分けられている。

今、ミロク達は上級レベルのモンスターを倒してきている。

アドバンス級はほんとうに強いモンスターばかりなので、気をつけたほうがいいとのことだ。

ミロクたちも一度挑戦したが、全く歯が立たず、クエストリタイアしたという。

そして、そのクエストを受注するための場所が集会所という。

集会所では全国の皆さんが集まつておりたくさんのハンターが生息している。

クエストは集会所にいる、受付嬢さんにクエスト一覧を見させてもらい、その中から選びクエストへ出発する。

クエスト一覧には、たくさんの人から依頼されたクエストがこんもりと書かれている。

クエストの依頼は村長に頼めば誰でも依頼することができる。そのかわり、クエストをこなしてくれたハンターには報酬金を払わなくてはならない。

ハンターは、クエストをクリアすると、報酬金とその倒したモンスターの素材や鉱物などがもらえる。

ハンター側からすると、村の平和を守るといつもあるが、その報酬目当てが多い。

実際ミロク達もその報酬を目当てにハンティングしている。その報酬で手に入った素材を使って武器などを作っていくわけだから、報酬はかなり重要なものだ。

もちろん、ハンティングに行つてる最中にゲットしたものはそのままのそのゲットした人のものになる。

次に、ハンターたちの職業について説明しよう。職業とはハンターたちが行う攻撃手段の傾向だ。

まず一つ目は「ソルジャー」だ。

ソルジャーとは主に剣を使い敵と戦う。

そのソルジャーが使える武器は、大剣、片手剣、短剣、太刀、槍、などがある。

それぞれの武器によつてメリット・デメリットがあるのでそれを駆使しながら戦うのがソルジャーだ。

そしてもうひとつは「ガンナー」だ。

ガンナーは、簡単に言うと鉄砲のようなものを使い攻撃する、遠距

離攻撃がメインの職業だ。

そのガンナーが使えるのは、ボウガン、ライフル、一二丁拳銃、弓、などがある。

ガンナーは弾などを所持していかなければならないので、結構からだが重くなり、若干動きが鈍つてしまつが、それをカバーしながら戦うのがガンナーだ。

そして最後。

もう一つは「マジシャン」だ。

マジシャンは全体的に少なく、マジシャンをしている人はあまり見かけない。

マジシャンの主な攻撃方法は、魔法だ。

だが、マジシャンは殆どといって良いくらい攻撃はしない。基本、マジシャンは周りの皆んなの補助に付いている。

体力を回復させたり、攻撃力を上げたり、モンスターの動きを制御したりなどと役に立つことしかしない。

アドバンス級のモンスターを倒しに行く時には一人はいたほうが心強いだろう。

これで職業についての説明は終わりだ。
あとは、これから進むに連れてわかってくると思うから、説明は不要だ。

「ふむふむ、なるほどね、この初心者ガイド、結構詳しく書いてあるわ。」

ミロクがそつたかやんに話しかけた。

するとたかやんはビクッと体を震わせ、こういった。

「うえ？！なんか言つた？？」

全く聞いていなかったようだ。

聞いていなかつたと言つより、魂が抜けていたようだ。

「いや、この初心者ガイドすげえなあと思つてや。」

ミロクがきちんともう一度説明してあげると、たかやんはこういった
「あーー！ それね！ 僕も最初読んだよ、かなり詳しく書いてあって
わかりやすかつたわ」

ミロクはたかやんも読んだのかと感心し、その初心者ガイドを棚に
しまった。

これからハントティングに出かけるため、今は準備をしていたところ
だった。

「とりあえず、何倒しに行くか決めようぜ」

「おれも、ライムリアの武器作りたいんだよね、つきあつてくれな
い？」

「あ、ライムリアか、いいよー」

といつわけで、これからミロク達は上級レベルのモンスターの【雷
神龍 ライムリア】を倒しに行くことになった。

ハンターさんの心得（後書き）

感想評価お願いします！

ライムリアとの死闘 前編

これからミロクとたかやんの死闘が始まる。

その為の準備を行う。

まずは、装備を考えなければならない。

今から倒しに行くのは【雷神龍 ライムリア】だ。

相手は雷属性なので、雷耐性値が強い防具で挑む必要がある。

そして、相手の弱点は火属性だ。

それにより、火属性攻撃が可能な武器を装備するのがいいだろ？

「うーん、どれでいいかなあー。俺はこの大剣でいいかな！」

そういうながらミロクが手にしたものは、真っ赤に染まつた、あからさまにこれは火属性だとわかるような武器だった。

その大剣はとても大きく、更にとても重くと不便な点ばかりだが、攻撃力の高さではすば抜けて大きいものだった。
ミロクはその大剣を担いで集会所へと向かつた。

その頃たかやんは

「火属性だろー？多分ミロクはあるの大剣で来ると思うんだよなあー。だったら俺は二丁拳銃かな。なんてつたって向こうは動きが遅いっていうデメリットがあるわけだから、こつちは早く動けたほうが多いに決まってるよなーよし！」

と、たかやんは独り言を呴きながら、あ、いや、叫びながら装備を着々と決めていた。

そして二丁拳銃を腰のポケットにしまい、集会所へと向かつた。

そして二人は集会所で合流した。

「あー、やっぱリミロク大剣できやがったw」

「な、なんだよ。変えてくるか?」

「いや、俺はそう来るだろうなと思って相性考えて装備してきただ!」

「おま、すげえなwさすがたかやんだ!」

たかやんは自分の予想が当たつたことに嬉しげな顔をしてアイテムの調達を終えた。

回復薬、爆弾、罠、食料、その他個人で必要なもの、を持ち、クエストへ出発した。

クエストの現場は「無人島」だ。

ここには至る所に雑魚モンスターがうようよしている為、大型モンスターだけに集中して攻撃することが若干困難な場所でもあるため、ここでのハンティングは上級として扱われている。

そして二人は無人島に到着した。

「ハアー、ここ来るの久々だなー!」

「おい、たかやん、あまり浮かれんなよ? ライムリア結構強いからな?」

「わあってるよ、んな事! 早速行こうぜ!」

二人は無人島の中を彷徨いながら、ライムリアを探していた。すると、雑魚モンスターが急に攻撃してきた。

「痛つ」

傷は切り傷程度だったが、まあまあ深く刺さっていた。

「おー、お前、こちなり俺に噛み付くとはいい一度胸じやねえか…」

ミロクは噛まれたことに對して苛立ちを感じた。

そして斬りつけようと、大剣を下ろし、大きく構えた。

その時、たかやんが拳銃でバン！と一発かました。

するとその銃弾はモンスターに直撃し、即死だった。

「うおー！俺が思つきりたたつ切るところだっただろ！」

「ミロクの武器は隙が大きいからこっちで撃ったほうが早いと思つたんだ。しかも、今はソムバードを倒してゐる場合ぢやないだろ？…さあとライムリア倒そづせー！」

ミロクはまだなと頷きそのまま探しに向かおうとした。
するとその時、後ろから大きな音が聞こえた。

「ん？なんだいまの音。」

「ライムリアさんのご登場だ！」

そう、ライムリアが空から舞い降りてきたのだ。

ライムリアは、ドラゴン。空を自由に飛ぶことができる。

どんなモンスターかは想像にお任せします

ライムリアは羽を使いやつくりと着地した。

だがしかし、ライムリアはまだ、ミロクたちの存在に気づいていない。

「お、まだ気付いてないようだな。」
「ゆっくり近づいて、溜め切りしてここー！」

「任せな」

ゆつくりゆつくりとライムリアに近づいていき、真横にたつた所で大剣を大きく構えた。
が、その時、気づかれた。

「グ…グオオオオオオオ…！」

ライムリアは大きく咆哮した。

そしてミロクは剣を思いつきり振りかざした。

「うわせえええ…！」

その大剣はライムリアの胴体を斬りつけた。

「よつしや行くぞおお…！」

二人の死闘が始まった。
たかやんは、すごいスピードで、走りながら正確に顔面を撃ち抜いていた。

ミロクは大きな大剣をブンブン振り回し、ライムリアを斬りまくっていた。
するとライムリアはちょっとだけ飛び、口から雷球をこちらに吐きつけて来た。

その雷球はミロクに直撃した。

「ぐああつ！」

ミロクは感電してしまい少しの間体が言つことを効かなくなつた。
その隙を逃さず、ライムリアはミロクを抑えつけ、大きな口でミロ

クを噛み付けた。

「うああああああああ！－！－！」

ノルマニカス・ビーコン

するとたかやんは2つの拳銃をクロスさせて力を溜め込んだ。

「離れろオーーー！」

その銃弾はライムリアの顔面に直撃した。

「グオオオオオ！」

ライムリアの大きな角が砕け散った。
それと同時にライムリアはよろけた、その隙を逃さずにミロクはすぐさまその場を離れた。

「助かつたぜ……」

「ああ、早く回復薬を飲め！すぐに来るぞ！」
「わかった。」

ミロクは回復薬を飲んだ。

「元気百倍！ミローグマン！」

「おい、いいからさつと攻撃に参加しやー。」

ミロクがつまらんボケを繰り出しているときに、たかやんはたくさんの攻撃を受け、からだがボロつてきていた。

「おお、ワリイ、よし、行くぜえ！」

そして、ミロクが戦いに参戦し、攻撃を開始した。ミロクの大剣はライムリアによく効いていたようだ。だんだんライムリアも弱ってきている。

「よし、ミロク！こっちに落とし穴仕掛けとくぞ！」
「おつけ！」

そして落とし穴を仕掛け終わるのを見計らつて、ミロクは落とし穴のある方へライムリアを誘導した。

ライムリアは見事に落とし穴にかかった。

その場で何もできず暴れているライムリアの顔面の部分に一人は大きな爆弾を設置した。

「ようし、たかやん！撃てええ！！！」

たかやんは全力で溜めた銃を爆弾めがけて撃つた。

すると爆弾は大きな音をたて爆発し、ライムリアの顔面はボロボロになつた。

角が2本とも折れてしまつたライムリアは、とてもかっこ悪かつた。するとライムリアが怒つてしまい、大きく咆哮をした。

「ぐああーーひるせえーなあーー！」

するとライムリアは、空の方へ顔を向けて、また大きく咆哮した。そうすると空はがだんだんと暗くなつていいくのが分かつた。
そして…

「グオオオオオオオオ！・！・！」

ズドン……バアアアーン！！！

空から雷が落ちてきた。

そしてその雷がたかやんと//ロクに命中した。

一人は声を合わせ倒れてしまつた。

いくから雷属性の高い防具でおススメです。雷を叩き落してしまったから

更に一人は感電してしまい全くからだが動かなくなってしまった。
果たして一人の運命は……？！

ライムコアとの死闘 前編（後書き）

感想評価お願ひします！

お気に入り登録（・・・・）ノリシク！

ライムリアとの死闘 後編

「くつ……からだが……動かねえ……！」

雷をモロ食らつてしまつた二人は、からだが麻痺していて全く言うことを効かない状態に陥つてしまつていだ。

「ぐあああああ！」

体が動かないため抵抗できずやられるがままに攻撃されていた。ミロクは、何度も何度も引っ搔かれていて、からだは傷だらけだった。

それを横目で見つめるしかないとやんはある意味ミロクより辛かつたはずだ。

い！

「ちくしょ、一動せよ、一・一・」

いくら頑張つてもやはりからだは動かなかつた。

するとライムリアが今度はたかやんの方へよってきた。
そして今度はたかやんに攻撃を始めた。

「……ぐああああああああ……死ぬつ！死ぬううう……」
「たかやああああん！！！ちくしょつ……ちくしょおおお……」

「光り射す閃光よ、今ここに新たな静寂を産み出せ。光の制裁」

「グオオオ？」

ライムリアの動きが止まつた。
そのライムリアのからだには無数の光の矢が刺さつており、関節を止められていた。

「雷鳴に轟く稻妻よ、今ここに新たな激戦を打ち破れ。緑の宝札」
ミロクとたかやんのからだにあつた無数の傷がみるみるうちに回復されていく。
そして、麻痺も溶けた。
体が自由に動く。

「大丈夫ですか？ 怪我の方は完璧には治りませんので、無理はしないで下さい。」

「あ、ありがとうございます！あのオ、どちらさまですか？」

「ほら、よそ見をしてはいけません。ライムリアが動き出しますよ？」

？」

謎の男がそう言つと、ライムリアは大きく咆哮をした。

そして、ライムリアは口から雷球を飛ばした。

その雷球は謎の男の方へと飛んでいった。

「光り輝く天使よ、今ここに我の身を守りし一枚の壁を産み出せ。」

謎の男がそう言つとその雷球は当たるギリギリにして消滅した。

「な、何だ、今の技……。すつげえ——！！」

「田久、わいせついつぶつ殺すぞ！」

ライムリアはもうすでに十分弱っていた。

かくかくストストノートた

三口ウは大剣でガードし、すぐに攻撃に繋げた。

ていた。

つと撃ち続けた。

「おつかせ」

ミロクは大剣でライムリアの頭をたたき切った。

するとライムリアは倒れた。

「今がチャンスだ！ミロク！思いつきり斬り付ける！」

ライムリアはズタズタに斬られ、頭は銃弾でバシバシ撃たれた。そしてライムリアはそのまま立ち上がることはなかつた。そう、ライムリアを倒したのだ。

「ニヤウニヤー！」

「よつしー・早速剥ぎ取りだ！」

二人は持参してたる剥ぎ取りナイフでライムリアの素材を剥ぎ取った。
そして、そのまま集会所へと戻った。

「はい、こちら報酬金の￥5,400です！」

「ありがとうございます。」

お金もいつぱいゲットしたし、今回は報酬が良かつたのでミロクは満足そうな顔をしていた。

「あ、そういうえば、さつきの人だれだったんだろ？？」

「ああー、後で見つけたら礼を言わなきゃね」

と、一人で話しているときに、その人はやつてきた。

「やあ、一人とも。ライムリアの討伐お疲れ様。」

「あ、さつきの！」

「噂をすれば…だな」

その男はさつきまで防具のせいであまり良く顔は見えなかつたが、今は顔がよく見える。

そして、ものすつ」「イケメンだ。

「あ、先程はありがとうございました！」

二人は深々と頭を下げ礼を言った。

「いやいや、ただ通りすがつただけですから」

嘘へたくそっ！通りすがつたって、無人島までなにしに来とんねん！

「あの、もし宜しければ、お名前を…」

「あ、私はまいける と申します。」

「まいけるさんですか、これからも色々お願ひします

「はい！あと、こちらから一つお願ひがあるのですが…」

「なんでしょう？」

「あの、あなた達と共に行動させていただけませんか？いわゆるパーティーと一緒に組みたいのです。」

なんと、まいけるさんから、パーティーに入りたいという申請がきた。

こっちが頑張つて誘おうと思つていたところだつたのですごく嬉しかった。

「ほ、ほんとうですか？！」

「是非、よろしくお願ひします！」

「いいんですか！？」

「ええ、もちろん！」

「ありがとうござりますーー！」

こうして、一人仲間が増えた。

「ちなみに、もうお分かりでしょうが、私は”マジシャン”です。」「やはりそうでしたか！すぐ役に立ちました！ありがとうございますーーましたー！」

「レで、ソルジャー、ガンナー、マジシャンが出揃つた。
これからもロクたちのハンター生活は続く。

ライムニアとの死闘 後編（後書き）

2話に渡るライムニアとの戦いが終わりました！

感想評価お願いします！

お気に入り登録（・・・・）ノヨロシク！

ハンターさんの討伐クエスト

ライムリアの討伐を終えた一人は、途中死にかけていた所を救けてくれた謎の男「まいける」との再会を果たし、パーティーへ入れようという誘いをだそうと計画していた。だがしかし、なんとまいけるさんからパーティーへ入りたいという申請があった。もちろん迷うことなく一人はパーティーへと入れた。まいけるの職業はマジシャンだった。これで、ソルジャー、ガンナー、マジシャンの全種類を使いこなせるパーティーとなつた。

「あ、ちなみに、俺はソルジャーも行けるよ」

そう、たかやんはガンナー専門ではなく、ソルジャーも全然行けるのであつた。

ミロクはソルジャー専門、まいけるはマジシャン専門、たかやんは、ソルジャーとガンナー。という職業になつている。

そして3人になつたミロク達はアドバンス級をめざすために日々修行を続けていた。

「よーし、次は何狩りに行く?」

「うーん、そうだなあ、なんか足りてない素材とか無いの?」

「まいけるさん、何が足りてないんですか?」

「あ、えっと、メラレイト鉱石なんですけど…」

「鉱石ですか！しかも、メラレイト！？あんなの余裕で手に入るじゃないですか！」

「昨日使つちやつたんですよ、武器の強化にね。だから足りなくて…」

「あ、いいですよ、行きましょうよ。フェイルの森行けば採掘できるつすよね」

「そうだね、でも、一応環境見とかないと。大型モンスターいるかも知れないからさ。」

「ですね！見てみましょつか！」

3人はクエスト一覧の横に書いてあるフェイルの森の環境状態をチェックした。

するとそこには

「狩獵環境：ややおだやか 天気：曇りっぽい晴れ 大型モンスター：サリアコイル」

と書いてあつた。

「天気：曇りっぽい晴れってなんやねん、っぽいつてなんやねん、そして何故天気っていう項目を作ったのか、そんな事より小型モンスターのほうが重要だろうに。」

ミロクがクールにツッコミを入れた。

もう、ツッコミに慣れていて無駄なテンションの高いツッコミとは

違い、クールなツツ「ミミだつた。

「うつか、サリアコイルかよーーなかなか手強いじゃん!」

「そうですね、でも、サリアくらいなら余裕で行けますでしょ。ついでに討伐しちゃいましょうよ。」

「分かりましたー!じゃ、//ロクー装備変更し終えたら//リド集合な

!」

「あいよ

たかやんが指揮をとつてクエストに向かうことになった。
そして3人はそれぞれ装備を揃えたあと、集会所で集合した。

「ヨオシ、みんな集まつたな!しゅっぽーつするぞっ!」

「いいよお

「あ、待つて下さー!」

「まこけらさん、じつしました?」

「ピッケル忘れました!」

「なんでそんな重要なものを!!」

「取りに行つてきます。」

「はあーー」

まいけるさんが行きたいと言つた採掘に欠かせないものを本人が忘れるのはどうかしてるだろ?と、ミロクはムツすりしていた。

「おそいなあ」

なんとそれから30分たつてもまいけるは姿を表さなかつた。またそれから30分が経過。まだ、まいけるは来ない。

「おい、どうこりつ」とだよ、なにしてんだよあいつ。」

「さすがに遅すぎるな、なにやってんだひつ。」

「さあな。」

「俺りで違うクエスト行こりつぜ。」

「そうだな、そうするか。」

ということで二人は、違うクエストへ向かつた。

そのクエストは「ギガアルデン」の討伐クエストだった。

ギガアルデンとはアルデンという雑魚モンの親みたいなやつだ。正直強くはないが、ギガアルデンから取れる「騎樓獸のきば」が足りてなくて、討伐クエストに行くことになつた。

ギガアルデンには1つだけとても強力な技があり、大きな牙で喉元を噛み碎くという技がある、その技を食らってしまうと死んでしまうと言われている。現に、死んでる人も少なくない。

「まあ、ギガアルデンでも、油断すんなよ。死ぬ可能性だつて低くないんだからな。」

「ああ、わかってる。」

「じゃ行くぞ！」

二人はギガアルデンの討伐へと向かつた。

このクエストの狩場はフェイルの森。
比較的狩猟がしやすい狩場だ。

そのおかげで、ギガアルデンをすぐ見つけることが出来た。

「おっと、見つけたぜ！」

今回の装備は、ミロクが短剣、たかやんが太刀を使っていた。
どちらもソルジャーのためすぐに終わりそうだ。

「とりやア！」

前回大剣だったミロクは短剣にしたためず、軽く感じ動きが軽やかだった。

そしてすぐスピーディーできれいだった。

「ふつ！ はつ！ そりやああ！」

たかやんは、大きな鋭い太刀をギガアルデンに斬りつけていた。
ガンナーじゃなくても、ソルジャーでも、全然強さは変わらないようだ。

いや、むしろソルジャーのほうが得意そうに見える。

ギガアルデンも負けていない。

「グギヤアアア！！」

大きな声を出し、アルテンをたくさん呼び出してきた。

「ちくしょう、こいつらメッシュチャクチャ邪魔だ！」

「俺に任せろ！たかやんはギガアルテンだけに集中してろ！」

ミロクはそう言つと、短剣でスパスマとアルテンを倒していく。アルテンはものすごいスピードで数が減つていく。

しかし、それに負けないスピードでアルテンがうづよ湧いてくる。

「コレじゃあいつまでたつてもきりがない…ちくしょう…」

「頑張つてくれ…」つちはもうソロ終わる…」

ギガアルテンも弱つてきていた。

ギガアルテンの目線の先にはミロクがいた。

ミロクはアルテンを倒していたため、ギガアルテンには気づいていなかつた。

ギガアルテンはミロクの喉元に大きな牙を突き刺そうとしていた。

「ミロク…あぶない…！」

たかやんがそういつたときには、もうすでに噛み付く寸前だった。すると…

ひゅっ…！

ミロクが、急に姿を消した。

「ハルミロク……？」

たかやんは噛み付かれなくてよかつたといつ気持ちと、何処へ言ったかという変な気持ちが入り混ざっていた。

「おい、ミロク！何処だ！ 痛つ！ギガアルデン邪魔だあああ……！」

大きく太刀を振り回す、すると。

「グギヤアアア……！」

ギガアルデンは死んだ。

たかやんは一人でギガアルデンの討伐に成功した。

そのハルミロクは

「俺、なんでベッドの上に……？まあ、いいや。寝るか。」

時間リアルワールドを遡ること3分。
現実世界では…

「啓介ーー！」飯よーー！」

「はあーい 今ギガアルデンの途中なんだけどなあ……。まあ、あとでも来れるからいつか！ぶちっちゃえ！」

「ほら啓介ーー！」飯冷めちゃうわよーーあ、ラーメンだった。麺のびる

わよー。

「はーはーこー今行くからーー。」

とことことだ。

啓介が突然電源を消したため、ミロクが急に消えたのだ。
消えたと言つよつは、ログアウトしたという方が正しいのか。

どちらにせよ、ミロクの[安全確保]だ。

「今日はもう少し食つたら寝よつと。」

ミロクは、明日まで田をさますことはなかつた。
ベッドの上でこびきをかき、疲れをとつてゐるようだ。

「ミロク向廻行きやがつたんだ?つたく、あした聞いてみるか。今
田はもう落ち

たかやンさんとがログアウトしました。

ハンターさんの討伐クエスト（後書き）

感想評価お願いします

お気に入り登録（ 、 、 、 ）ノリ口シク

ハンターさんの夢

「……はつ……はつ……はつ……ちくしょお……」

ミロクは全力ダッシュだった。

ミロクの後ろからは、大きなドラゴンが。

【神轟龍 アクティレス】

4大神の一體の龍。

神の放つ咆哮は、大地を轟かせ、天空龍の血を枯らす。

アクティレスの目線の先にはミロクしかいない。

ミロクはアクティレスにターゲットされている。

「…………ハア…………ハア…………ハア…………クソ…………！何処まで追いかけてきやがるんだ！」

ミロクは逃げる。
だがしかし

ズドン！

ミロクの目の前に、もう一匹の敵が。。。

【極星獣 ベルギウス】

鋭利な牙と鋭い爪で全てを薙ぎ払う。

その偉大なる魂が心を閉ざすとき、漆黒の闇へと葬り去る。

「おこおこ、まじかよ…」

ミロクは足が竦んで動けなかつた。

そして、超大型モンスターに挟まれたミロクは、そのまま2匹の餌食になるしかなかつた。

2匹は同時にミロクに噛み付いた。

「う、うわあアアアア…！」

バサツ……

「ひおおー……ハア…ハア…夢か……。」

まさかの夢オチだ。

ミロクはベッドから跳ねあがつた。
だがしかし、ベッドからは出れないシステム。
すぐに動けなくなってしまった。

「つたぐ、また田詫めちまつたよ。早く帰つてこないかなあ。」

そう、ミロクは操作主である、啓介の帰りを待たねばならぬのだ。
この待つている時間がどれほど苦痛かみんなにはわかるだろうか。
なにも出来ずにベッドで横たわつたまま啓介の帰りを待つ。
きつすぎるといふしか無い。

「たあだいまー

今回は早く帰つてくれた。

「よっしゃ、早かつたじゃねえか啓介ー。」

ミロクのテンションゲージが上がった。

「やうこえは今日は3人で狩猟か。腕がなるぜ」

ミロクのテンションゲージがもつと上がった。

「しかも今日は、商売人さんの品物半額だーじやん」

ミロクのテンションゲージがもつともつと上がった。

「啓介ー！勉強しなきー！いつまでもゲームばっかりやってもいい仕事に就けないわよー！」

「はーい。つたぐ、ショウがない。今日は我慢して勉強するか。」

ミロクのテンションゲージが今まで下がった。

「なんでだよおおお……なんでそりなるんだよおおお……おかしこやろおおお……」

ところ訳で、今日はミロクはずつとベッドの上だ。

24時間後までまたなればならぬ。

24時間後には、狩猟に出てるはずだ。

その頃、たかやんは

「ミロク、きゅうねえのかなあ。昨日急に消えてきゅうになつて、まさか…。」

たかやんは変な妄想をしてしまっていた。
ミロクが誘拐されたんじゃないかと。

「そんなはずないか。」

たかやんは一人でクエストに向かつた。

その頃、まいけるは

「こやあー、昨日懲り事としたなー、テレビの前通過したり面白
い番組やつてそのまま釘付けになつちまつたんだよなー。やつ
ちまつちなー。」

まいけるは、これっぽつひも説びよつとする姿を見せずにブツブツ
言つていた。

そしてまいけるは、「今日せもひやめるのか、早いなー」と言つながら
ら消えた。

まいけるちゃんがログアウトしました。

「はああー、ジャンプ読み飽きたよおー、暇ダナー。」

ミロクは「のまま一日を過いざななければならなかつた。

そして、24時間後

ハンターさんの夢（後書き）

感想評価お願ひします
お気に入り登録（・・・・）ノリティック

短くてすいません
眠すぎます　ｗｗｗ

ハンターさんの友情深まる

「よおーしー昨日我慢したから、今日はたくさんやるぞーー！」

啓介が気合を入れてそう言つと、ミロクの体が解放された。

「ん？ お、おおおお！ …動けるっ！ 動けるぜえーー！」

そう、ミロクは約38時間ぶりの解放だ。

そのためミロクの体は大分鈍っていた。

「今日は何のクエストに行こうかなー、ー、あ、そつだ！たかやんに謝らないと」

ミロクはクエスト一覧表のところに行つた。

そこにはたくさんのクエスト情報と誰がどのクエストに行つてるかが記入されている。

「んーつと？たかやんはー……あーあつた！」

そこには確かにたかやんと記入されていた。

「ゲッ！ あいつ…ベルギティウス行つてんのかよ…！」

【毒眼龍 ベルギティウス】

ドラゴンの中では小型タイプ。

小型が故に素早い動きで相手を翻弄してくる。

あこつと田^タが合^ハつと超音波で猛毒を浴びてしまひ。

「仕方ねえ、俺も行くか…」

ミロクはたかやんに会いに渋々ベルギーディウスの討伐クエストに行くことになった。

今回の戦場^{バトルフィールド}は、「渓流」だ。

渓流は穏やかな場所でここでのハンティングはビシバシかと言えば下級向けだ。

「ああーって、たかやんは何処かしらー？」

ミロクが探していると、たかやんらしき人物が走つてくるのが見えた。

「ハ、ミロクウウウウ――――――た、た、助けてくれえ――――――！」

「え？」

たかやんの後ろにはベルギーディウスがついてきていた。

「ええええええ？！」

ミロクはベルギーディウス見つかってしまったようだ。ベルギーディウスはミロクに毒を吐いてきた。

「ぬおつーあぶねえ！」

ミロクは間一髪の所を躲した。

今回ミロクは、片手剣で来ていた。

そしてたかやんは大剣だった。

たかやんはその大剣で思いつきり下からベルギディウスを斬り上げた。

「つおおおりやああ！…！」

その斬り上げた大剣はベルギディウスに、そしてミロクにも当たった。

ミロクは中に吹き飛ばされた。

「うわあん…（泣）」

ミロクはそのまま地面に叩き付けられた。

「あー悪いー見てなかつた！」

「お、おお…気にするな…。」

ベルギディウスは咆哮した。

「ピギヤアアア…！…！」

「よーし！行くぞミロクー！ぶつ倒せえーー！」

「『』めん、俺、動けない…『』

「ちょ、えええ！？」

ミロクは地面に吊り付けられと時の衝撃で、体が痺れていた。

「ちょっと休憩…」

「つたくー・しゃ あない！俺が相手だ！」

30分後

集会所にミロクとたかやんの姿が。

「今回の報酬は￥8,300です！」

「うほっ、大金！」

たかやんとミロクはなんとかベルギディウスを倒したようだ。

「いや、昨日は悪かつたな、おどといも」

「ああー、大丈夫！気にすんなって！」

「おお、まじか、ありがとうー。」

「ああー早速クエスト行こうぜー。」

「うして一人に友情は更に深まったのであった。

ハンターさんの友情深まる（後編）

感想評価お願いします

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5883z/>

これこそリアルなハンター生活。

2012年1月5日17時52分発行